

学 位 論 文 要 旨

氏 名 川 北 雅 子

題目 学校音楽教育における阿波人形浄瑠璃の教育的価値と教材としての可能性に関する研究

学位論文要旨（和文2,000字又は英文1,000語程度）

本研究の目的は、地域の伝統文化である阿波人形浄瑠璃の教育的価値を論理的に検討し、学校音楽教育における教材としての可能性を実践的な考察を通して検討することである。

この目的を達成するために、まず、一般教育学や音楽科教育学に関する知見を援用しながら、文化と人間形成について論考した。次に、阿波人形浄瑠璃に関する文献の吟味、特に、史料『義太夫調査書』（1913）に焦点をあてた吟味と徳島県内でのフィールドワークを通して、阿波人形浄瑠璃の特質、社会教育的な価値、学校音楽教育における価値について、原理的に考察した。そして、阿波人形浄瑠璃の代表的な演目《傾城阿波の鳴門》〈順礼歌の段〉について、教材としての本質的な特性を考察した。また、これらの結果に基づいて、《傾城阿波の鳴門》〈順礼歌の段〉を教材とした授業を構想し、実践を通して教材としての可能性を考察した。

本論文は、序章と終章、第Ⅰ部(第一～第三章)、第Ⅱ部(第四～第六章)、第Ⅲ部(第七～第九章)で構成し、第Ⅰ部を郷土芸能の文化的価値と教育的価値に関する原理的考察、第Ⅱ部を阿波人形浄瑠璃の教育的価値に関する分析的考察、第Ⅲ部を《傾城阿波の鳴門》〈順礼歌の段〉の教材としての可能性に関する実践的考察とした。

第Ⅰ部第一章では、人間は、文化の伝達・再創造の過程において、客観化された精神や共通精神、規範的精神を意識することによって、自己の内面を豊かにしていくことが可能になることを確認した。第二章では、音楽科教育の本質は、このような文化として存在する音楽を媒介として、子どもの内面を豊かにしていくことであることを確認した。そして、第三章では、子どもは、音楽の授業において、一つの文化として存在する地域の人形芝居に関わり、ここに内在する簡素、滑稽、陽性、悲哀を意識することによって、自己の内面を豊かにし、郷土の伝統文化の伝達・再創造に関与しようとする態度を養うことが可能になることを確認した。

第Ⅱ部第四章では、阿波人形浄瑠璃には、儀式的な色彩が強く、特に、農村地域において、奉納芸として演じられてきたという文化的な特質があることを明らかにした。第五章では、阿波人形浄瑠璃に内在する「忠」「孝」の徳目の原理的、本質的な側面には、社会教育的な価値があること、また、阿波人形浄瑠

璃に内在する客観化された精神として特徴づけられる悲哀には、音楽科としての教育的価値があることを明らかにした。そして、第六章では、阿波人形浄瑠璃の代表的な演目《傾城阿波の鳴門》〈順礼歌の段〉にはお弓お鶴親子の情愛と悲哀が顕著に表現されており、中学校の音楽科の教材として、具体的であり、簡潔であり、典型であることが確認された。また、音楽の授業において、親子の情愛と悲哀を意識させ、この人間感情の様態のイメージをとらえ直させることによって、生徒の内面を豊かにしていく可能性があることが明らかになった。

第Ⅲ部第七章では、前章の考察をふまえて、《傾城阿波の鳴門》〈順礼歌の段〉の中にみられる親子の情愛と悲哀を生徒に意識させるために、音楽教師による浄瑠璃の語りの模倣や三味線と人形にふれる体験の場を組み込んだ鑑賞の授業を実践した。この実践から、声の音色に注意を向けながら表現や鑑賞をしていた生徒は、親子の情愛と悲哀を意識し、学校外においてももう一度鑑賞したいという思いを持つようになったことが確認され、声の音色を中核的な学習内容にすることによって、教材としての可能性が高まることが明らかになった。そこで、第八章では、声の音色を中核的な学習内容とした授業を構想し、太夫の語りを直接的に鑑賞させる授業を実践した。この実践から、声の音色を色で喩えていた生徒は、親子の情愛と悲哀を深く感じ取り、今後も学び続けようとする思いを持つようになったことが確認され、声の音色に注意を向けさせることを可能にする生徒の音楽的な活動を充実させることによって、教材としての可能性が高まることが明らかになった。そこで、第九章では、生徒の音楽的な活動を充実させるために、太夫の指導を受けながら、〈順礼歌の段〉の一節を生徒自身が語る授業を構想し、鑑賞と表現を密接に結びつけた授業を実践した。この実践から、「引き寄せて」「ふり返り」という「地(地合)」の産字の部分の声の音色に注意を向けていた生徒は、母お弓の辛苦の心情を深く感じ取り、この経験をよりどころにして、阿波人形浄瑠璃という郷土の伝統文化を継承しようという思いを持つようになったことが確認され、このことから、「地(地合)」の産字の部分の声の音色に注目させ、母お弓の人間感情の様態を詳細に把握できるよう支援することによって、教材としての可能性が高まることが明らかになった。

以上のように、本研究では、第Ⅰ部と第Ⅱ部の教育的価値に関する考察の成果をふまえて、第Ⅲ部において《傾城阿波の鳴門》〈順礼歌の段〉を教材とした授業の構想と実践を試み、学校音楽教育において、阿波人形浄瑠璃という郷土芸能には、子どもの人間形成の営みを促進し、郷土の伝統文化の継承に関与しようとする態度を養うことが可能になることを確認することができた。特に、中学生を対象とした《傾城阿波の鳴門》〈順礼歌の段〉を教材とする授業においては、声の音色が中核的な学習内容であること、鑑賞と表現を密接に結びつけた生徒の音楽的な活動を充実させること、「地(地合)」の産字の部分の声の音色に生徒の注意を向けさせ、母お弓の人間感情の様態を詳細に把握させることによって教材としての可能性が高まることが明らかになった。